

先輩

江田三郎

戦後の政界にあつて、江田さんほど多彩で華麗で、しかも、どこかにベースの影のある政治的軌跡を残してきた人はない。いま、また『中道革新』の旗頭として、その去就が注目されている中に、中天に鮮かな光芒を残しつつ急逝された。その意味で、江田さんの生涯は、一編の政治ドラマであつたような思いがする。

江田さんは、私の先輩として、学校においても政界においても、私より二、三年先を歩かれた。私が、池田内閣の官房長官をしていたころ、江田さんは、社会党の書記長であつた。また凶刃に倒れた浅沼委員長に代わつて委員長代行になられたのもそのころのことであつた。その後、長く社会党の内外で路線論争の基礎となつた構造改革論　いわゆる『江田ビジョン』を発表されたのも昭和三十六年のころではなかつたらうか。ふさふさとした白銀のような頭髪と赤味をおびた

たくましい風貌に恵まれ、巧みに人々の心をとらえる提言をよくされた江田さんであった。江田さんには、時流を深く見詰め、これを政治の舞台に乗せてくる鋭い時代感覚とすばらしい表現力に加うるに、倦むことを知らぬ実行力があつた。この三月、江田さんが日本社会党を離党し、社会市民連合を結成して、新しい活躍の場を求められたのも、その鋭い時代感覚によるものであつたと思ふ。

江田さんは、社会党離党にさいしての声明の中で、『日本の政治が大きな変革の時代に入った』と指摘された。保守と革新の厳しい対立の中から『中道革新』の政治路線が一躍脚光をあげ、江田さんは、好むと好まざるとにかかわらず、その旗手と目されるに至つた。しかも、その運動の当面の照準が来たるべき参議院選挙後にあてられ、江田さんは、正にわが国の政局の動向を占う台風の目と見られるようになった。そうした時期であるだけに、突然の逝去は、わが国の政界にとり大きな衝撃であつた。

江田さんと私は、政治的な立場や信条がちがつていた。また江田さんは、非凡な人であつたが、私は平骨である。それだけに、江田さんの一挙手、一投足に、私は常に強い関心を持つとともに、江田さんに対し一種の羨望と畏敬の念を持ち続けてきた。そしていま、江田さんがいよいよ急逝されてみると、やり場のない寂寥の思いを禁ずることができない。

6. 追慕塔

しかし、江田さんの鮮烈な思想と行動をぬきにして、わが国戦後の政治を回想することはできない。また、私とたどった道はちがっていたし、思想や立場にもへだたりがあつたが、国民の幸せを念じる思いにかけては、お互いに少しも変わらなかつたように思う。そのことが、私にとつては、せめてもの慰めである。生前、休息を知らず活動し続けた江田さんであつた。今後は一切を、信頼する令息と同志にゆだねて、これからは静かな休息を享受されることを祈念したい。

(昭、五二・五・二四「四国新聞」ほか)